# 弘法大師行狀記

四

弘法大師行狀記卷之七

大師歸朝ありて海路風波の難をいとはせ給ふ
ことなりて天神地祇の感を仰ぎ給ひ誓願あ
つく誓約をなしたまふ志ありしかども日月
なほ久しくして墨勅未だ到らざりしかば
日運幸ひかさなり一紀朝を過ぎて弘仁七年季
夏乃ち遂に給ひぬ大師の素願を遂げ給ひ和尚の
傳法を受けたまひて修禪の梵宇として諸の貴子
をして法ふかくして修行せしめ給ふ天威ひ

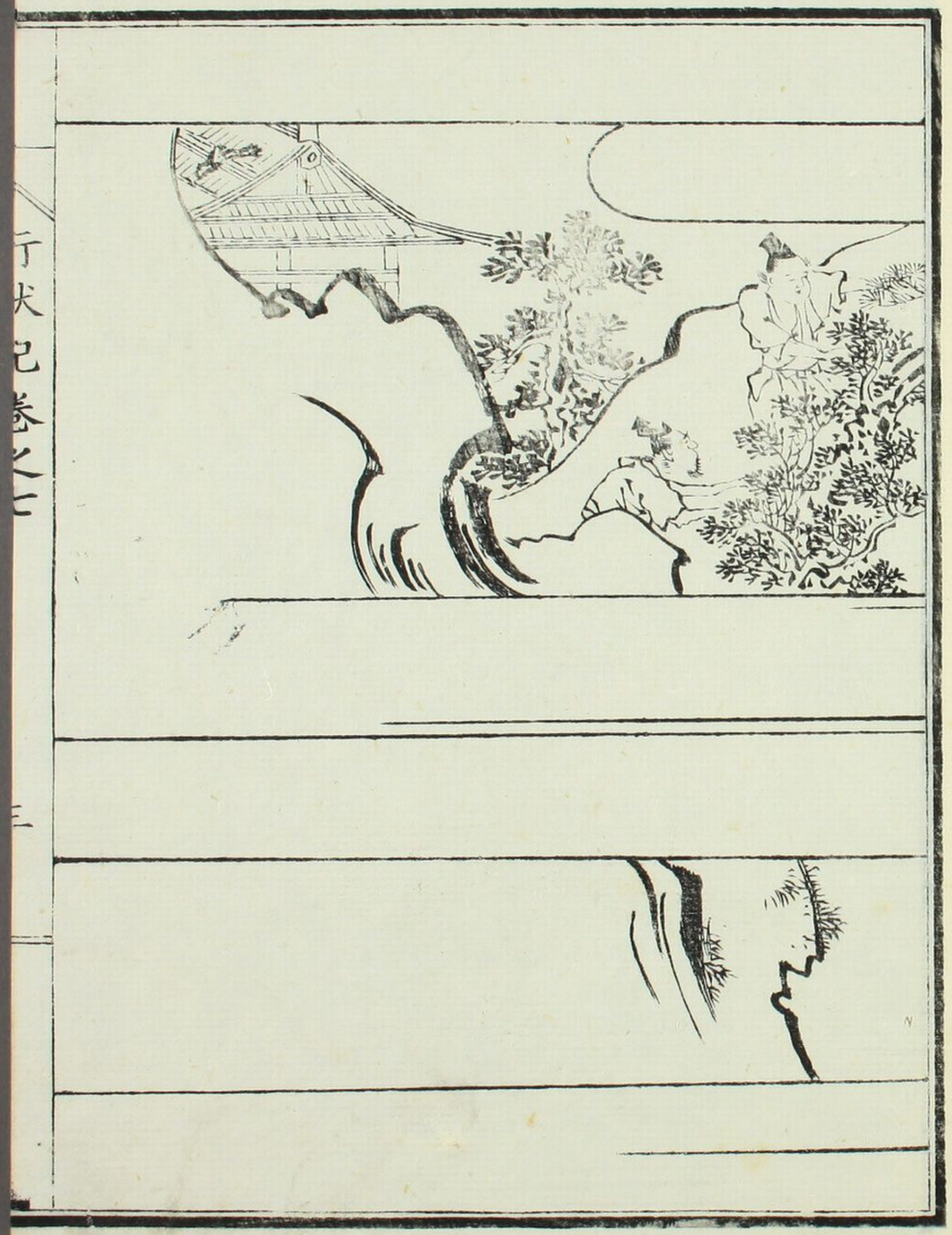
石崎文庫

若神力と海を圓とまりの生活利をもる基なるべ
しと心食々ふ少年時の夢心林を渉覽
志給しよ吉野山より南ふ去ること一日更ふ西り
向く南日の程を經て平原の邊地より紀伊国
伊都の郡ふ南より西り今の高野山是なり
是地形を易ぬふ葱嶺根漢ふ入もて白
峯碧落ふ接けを東西を龍の脈をうごかしと
して流れの水より南北ハ虎の踞まるがごとく
棲息ふ地より深盧ふ聚ざれども忽ふ雲漢り
入物茅を背ざるもの神靈とうるとを紙をうり

物言とうして友とし輪鐵をうく常ともとも
ふの地を教有ふるべしを絶禪乃所
なるべしと思食常ふ六月十九日表を書て
此心試ト請られ入定の地と定給へり
表の文よいとく心言るしてふ別雲函物とうるし
水積くハ則奥弱產地をものゆへよ蒼闇乃渡
岸よ能仁の跡休をばゆへ孤峯の奇峯ふ觀世の
縱和續なり是訴由を尋ぬるふ地勝をのづから
志うるり又ハ龕窟の如寺よ禪窟肩況なるべ
天山ふ一院よ定給法を連ぬ是則國の宝民の

## 南山表請

朝廷より表を奉て高野山
弘闡の圖

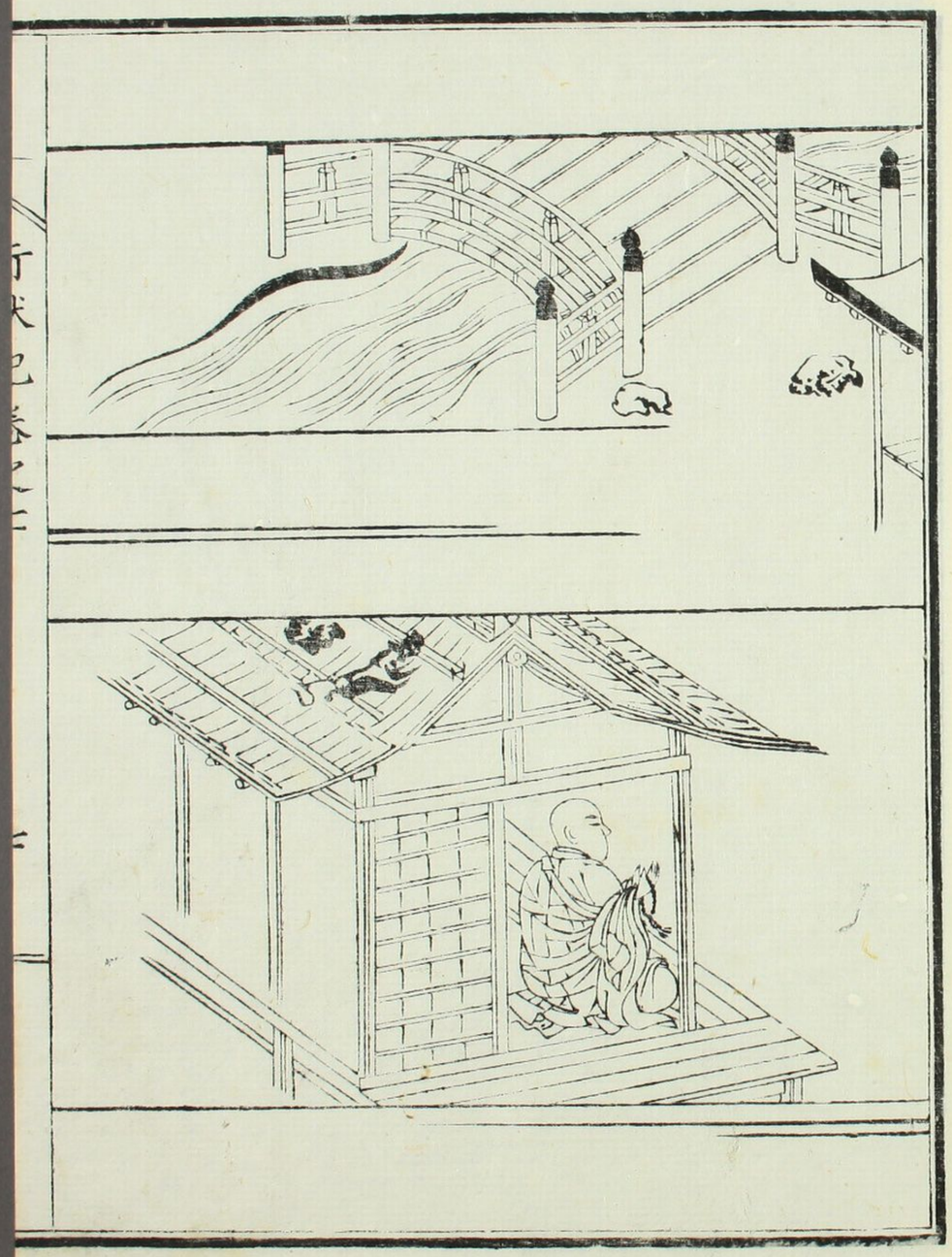


其二

梁の伏惟　我邦歷代の　皇帝仏を佛法まことに
先て金剛眼意樹の如くよ紹隆ふ比び法義の教象
寺ことに林を紹きり法の興隆まことして是まり但
う雖むら多き高心源巖よ口禪は密宗を一く
幽叢藪ふ入定の賓まれり実よ見禪教を
はちさいしず但慶和意をざるがいくすとを弱るり
今禪經の説よ准ずるよ源心の平地を修禪り
よ源心今思はくよハ法家の御ためハ諸の修行
者のと為よ荒叢を芟薙て禪修禪の一院を建
ちせむ法の興廢ハ悉く天仏ふ所を若ハ大若ハ小

敢て自由ならず重請ら多ハ彼空地と陽る事を
願くハ多少頼を遂む慈則ハ時り勤念しく而
霧乃恩を蓋くくまれむ云へを　天許
とを去ぬを為ら事ハ同七月八日官裁の
紙旨を下さる大師十為り泰範実惠ふ大法
をして彼山よむりいしめ荒叢とりもひて
且一来の草菴をむもび高雄の舊居を避て南
心の源巖よ移入給よりり
大師南心よ居住し給時頻よ明神ふ湧護あり
即地主山主形をりりして告てのくまはく空

性とこれ人事ふうとして　乃是浮雲乃
きぐひ　ひとり吾をあまた此心の主地事ふ善薩ふ
達らてまつる徳のいとまもなり　別に領地を献事
つまく雲をまた盛論をまし給へ雲是丹生津
比咩の一乃御子言野大明神誓約とおし給へる
なり又大師被心ふのあり如なむし時心語のおと
つまふ女神丹生津姫の命の社あり其発ふ
十町許の澤ありて今天野といふ名大師
心所ふ者し給しふ明神巫祝ふ託して妻神乃
ふのりて盛福をのぶむ事むさしまさりいま



丹生明神
神託の圖

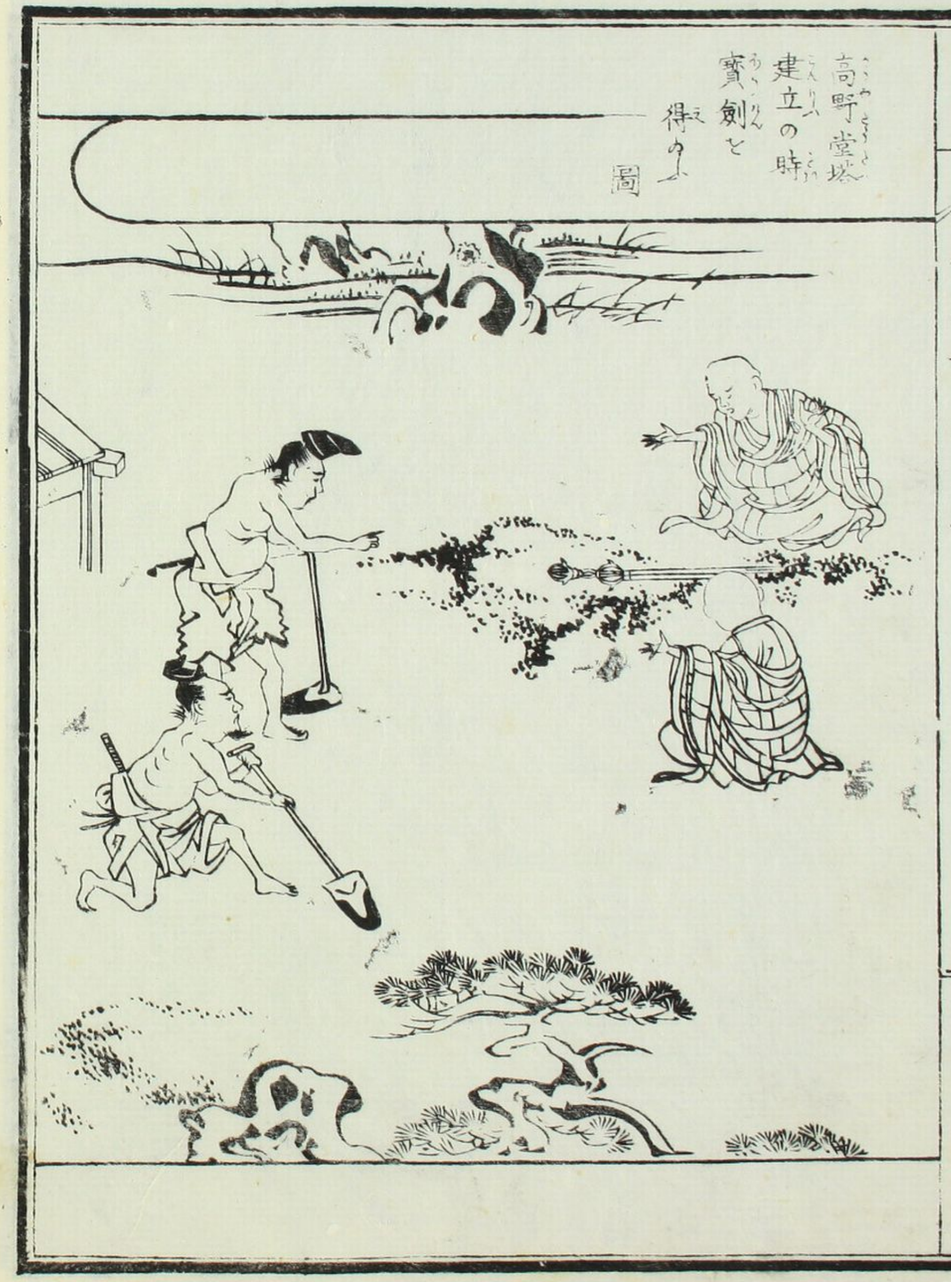
菩薩は心ふかく行基菩ゞ幸あり弟子首人をもつて
元食玉鹽命家地万詳町を給まり南八南海を
かぎりふき日本河をうばり東を大和国をはらひ
西は慈神心の谷をさうへ是頼八是をとゝまりて
永世ま仰信の情を河らいつもとの給ひて大師列
明神ふ法施し給いむゞ為ふ天皇ま社のわをまま
曼荼羅院を菓剣をさまひき後ま河ら毎めく
奥ま心をうされうまの丹生明神八仰信素波
尊の御子をして十二御子を率ひて一百世不乃
天神を眷屬ら給ふ

仁十年ふ法守を勅法し給して是ふの神達を
崇ゝてまりて此心の護法と定給て大師後生の
弟子門徒ゝん人日ゝて教主ま云ふを誦じて
法味をゝむを求て場をまて
ふを合法久住の業ゝ
へりまをふりて丹生
心下ふいまひをまりて
加し神威をまし佛法をさゝりまもまを
毋いうべれをや
大師官爵をたまりを給く後伽藍況菓剣し

高野結界

大師高野結界及び唐土より投し三鈷の松木ゆうさんてこそ秘教相應の地なる支を知る圖

高野堂塔建立の時寶劍を得る圖



給ひしよりて七日七夜大結界の法を行給ひしに
東西南北四維上下七里より内はなげき障礙
なす悪鬼神をしてつゝしむ事若心のりて佛法の
中に利益あるべき物をとゞめ給へり
又樹木を切拂ひし時唐船より投給ひし二結
儀鉾をして緑松の梢にまつり是を清覧じて
いよ〳〵秘教和意の法地しる事を知給へり志賀
信正大師の付属とう事中院を建立してまを
らの道具を崇ら是なるとうや
又大師地獄ひしに多いしぎ給ひし時長四尺廣一寸

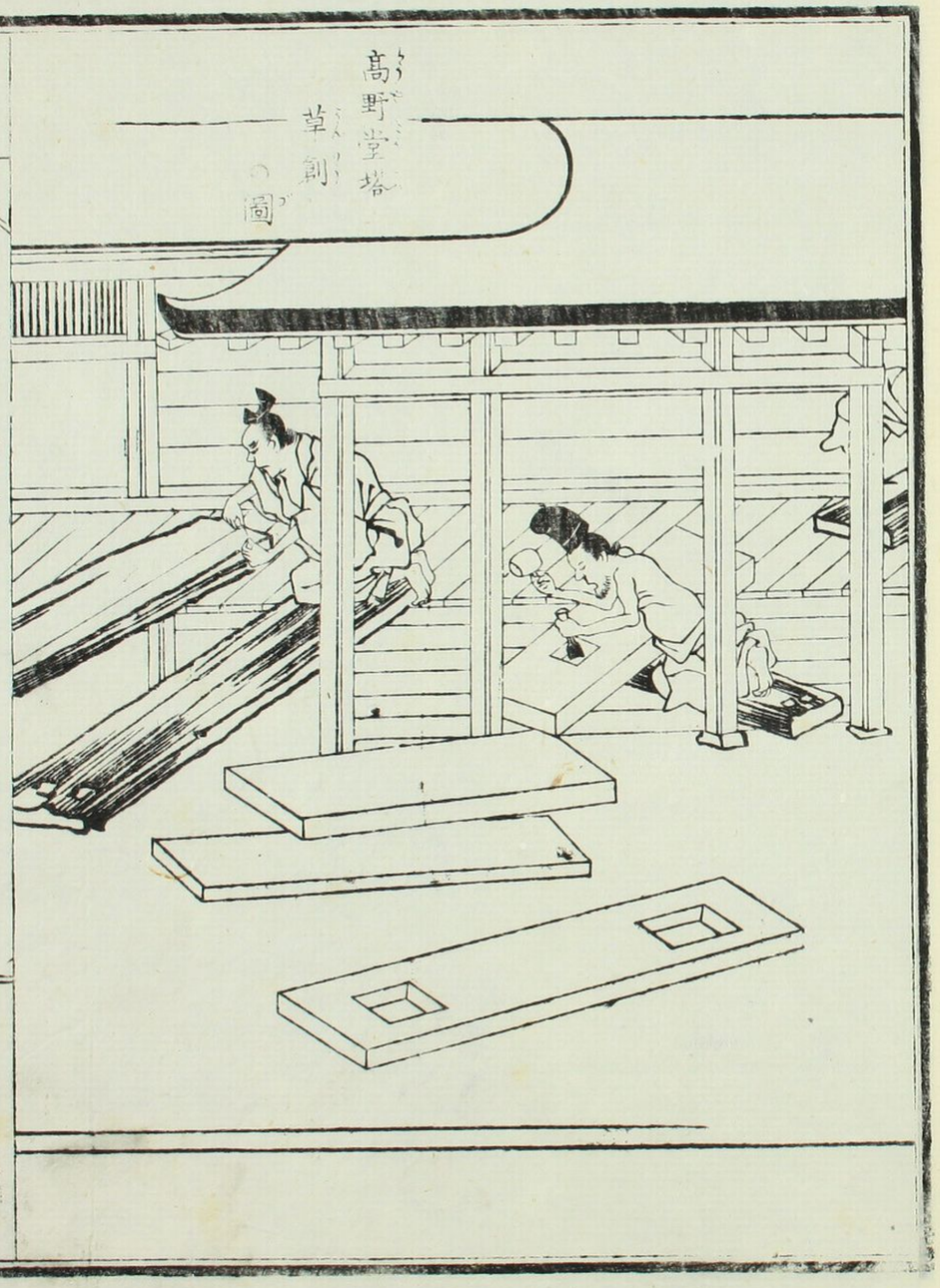
八分の寶劔を石龕の中より堀出されしより則古紀
の接雲先仏の高墓なる事は志賀
よりて　　叡覧ふ給ふ即先しとゞめ給へり
ふ事り後よいしをうきをなきと侍るう
れ占を堀らかりれしり事を八ぢ劔のつぎふやと
みえをふよりて網乃間ふ入くもものををを
うゝ堀りれかゝ
大師居住給く後上ぶ寺院堂塔坊舎ゆう
屋くを数ありすかりを宮ふ進ぶ法願の庭と
ゆうをれく金剛峯寺と名づ事給へり先三間

四面の金堂一宇を造り一丈六天の阿閦仏八天
の寸法四善議を安置をはり毛髮理界智界
の梔織とひろく法永智永の仏事をいとなむ
思食さるべき知識を十方よりあつめ奈良と四衆よ
の供養給人法ひろめ様字の経様ひろく多
寶の大塔を建らる外ふ八十六丈の制相うるはしく
堂ばくて内ふ八聚院の曼荼羅と並べてをを
一層の叢雲は中よりみ九輪のうるはし
の外よりはうり朱彩紅欄の様へ鈴日ふ照耀して
あざやかふ玉鈴金鐸のひびき暁風よ寒亮と

していきどをり内外の莊嚴秘密の表示をなく
さるべきの事多大師修法志ざ年ばかりね
堂舎ほのかなりけり坐人ひとおぼ給ひ
ぐらを　上皇志ざしふ　勅願ありて中務省
ふ毎日一宇ばかりの御祈志ざり
きの給遠ふ志と逆給ふ事ひまなきあり
春秋ふ間一年に一度ばかりひ清覧
じ廻ら

又天長ふ　聖主　勅ありて大和ふ福寺
ばかりて是大師高野清淨ふ日の旅宿

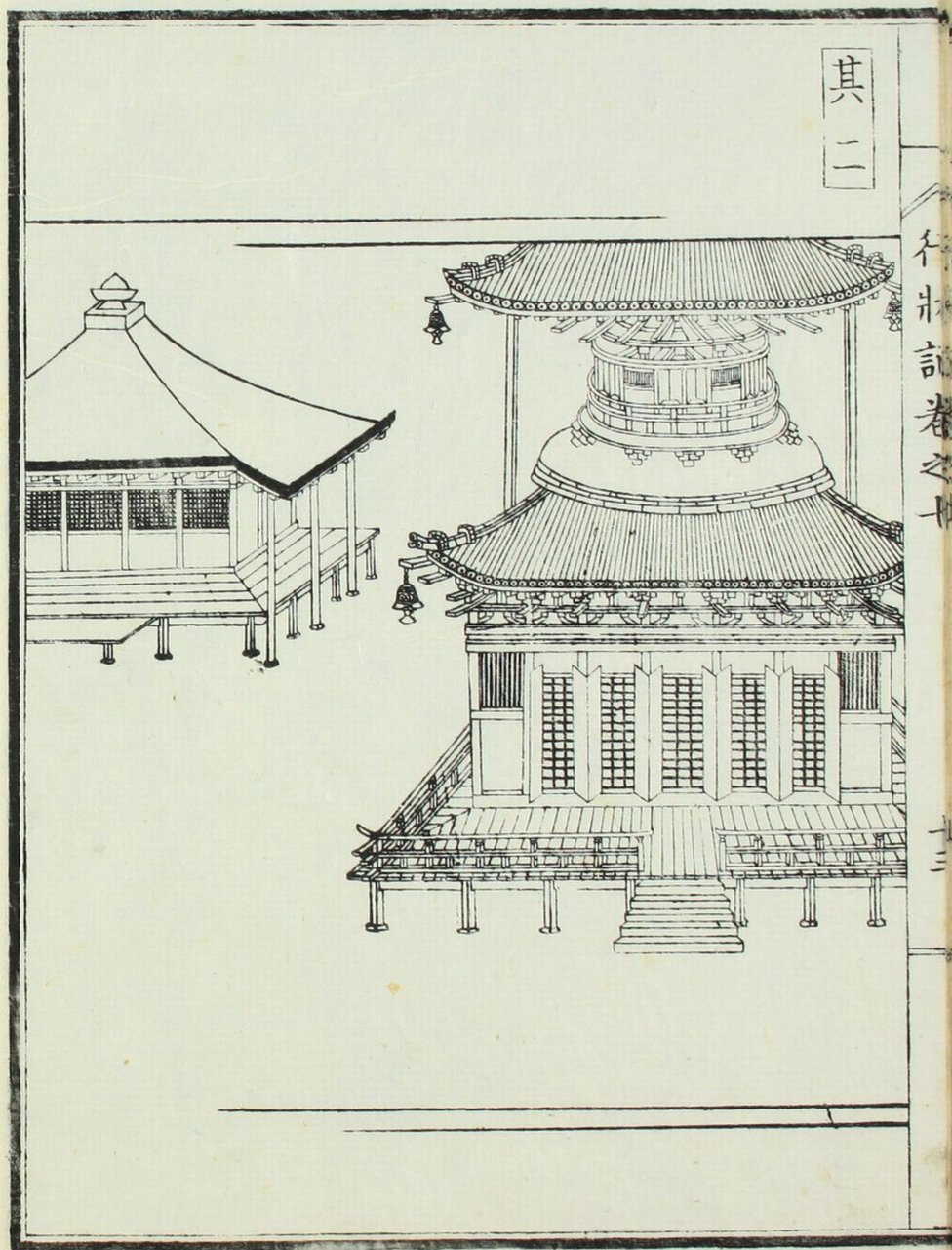
高野堂塔
草創
圖





堂塔草創

其二

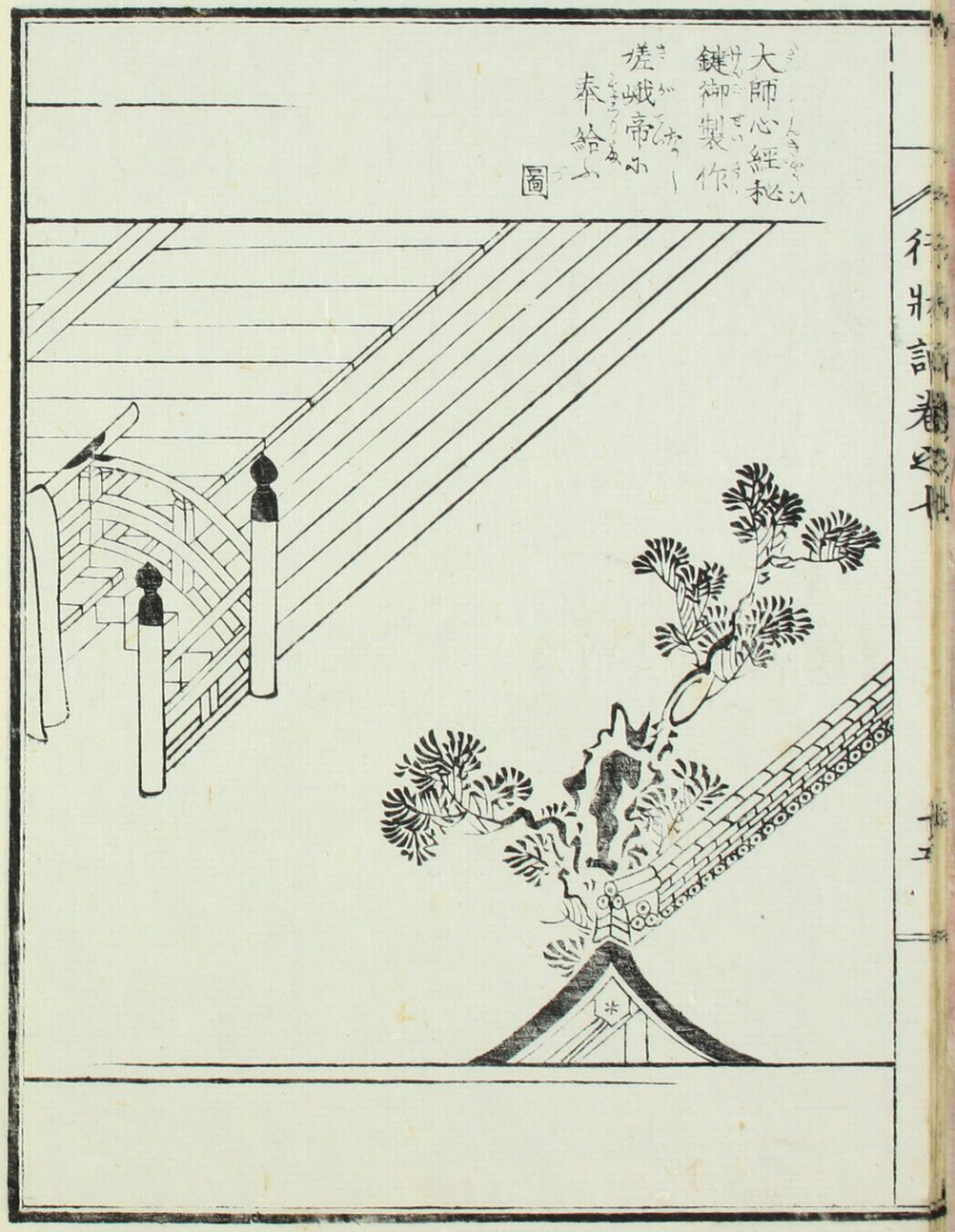




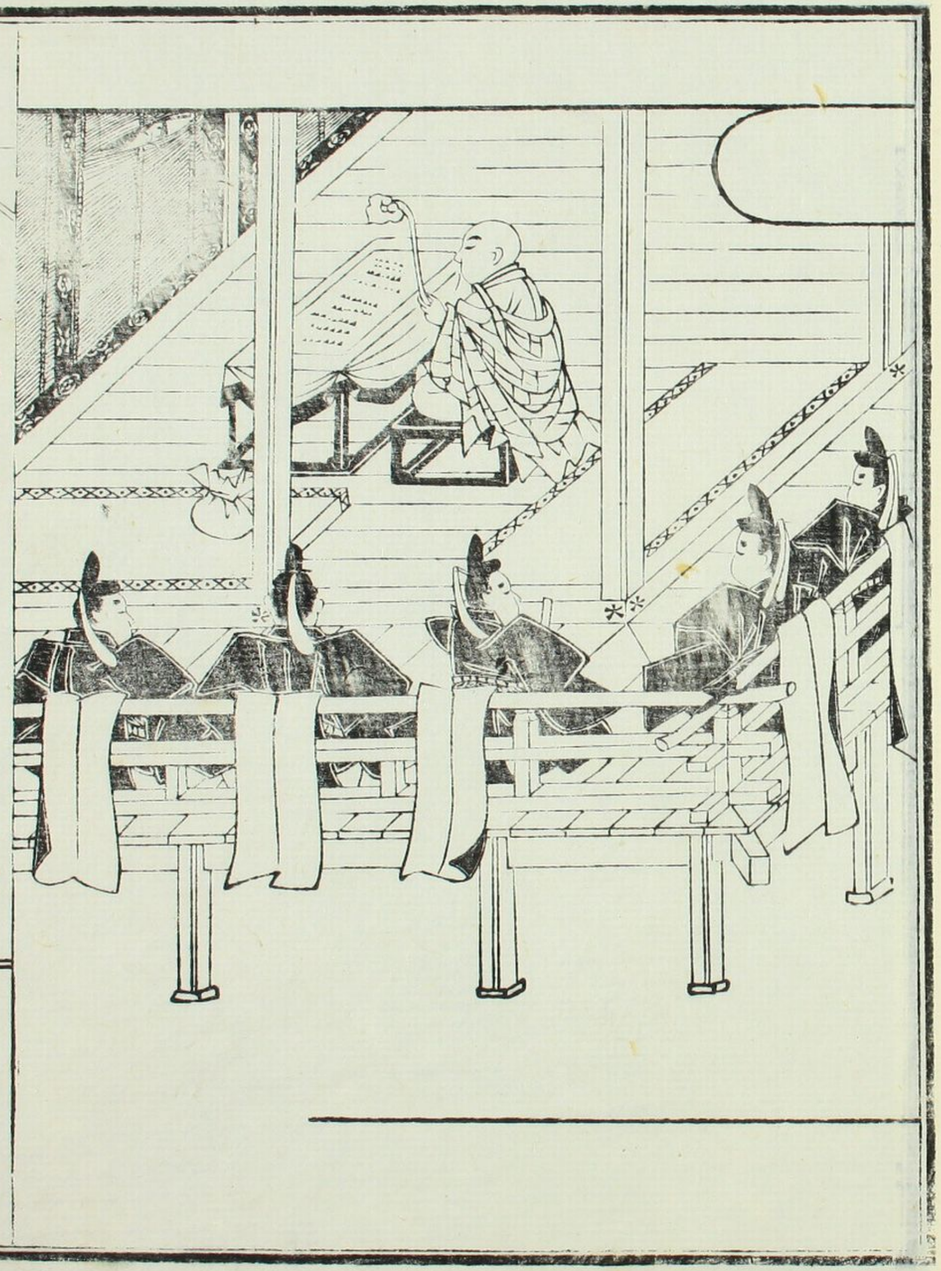
乃ち法師に向て給ひ給ふ事あり此ものと
能登浄三京天皇の御願あり大師に勅給
ありて後師資相承の不易なり志雅法師に付屬
と得給ふ後年永を東寺に長者に付ていまに
爰願ある所なり
弘仁九年の春天下疫の災起る國中夭
死の枕多して京野人のうづ木をいとし岡岡鬼
はもみうと成志うを
給ふ　宸襟やもだしがたく愛に擁の御ことと
を始めしめ給ひて玉體をふるひて金字乃

授若くは講じて開題の唱導と
給ふ即　勅喚ふ應じて祕鍵一巻を製作ひ
心經文分は幽旨を宣給ふ未結願ふ及ざるを
蘇生のやうみちふ却て閻忽に還じ
日光赫奕たり杳冥書ハ神明佛ふ愛
味ふ給ふ所ふ法樂しまつれぞうるべ
納受ひりとやうしまつり大師の上表の文り神
舎ふ詣を無常ハ祕鍵を通じまつらべし
昔響華説法の地ふ臨てまたひららの源文と
さきもり豊を紙ふ達摩ばらんやとかを給きり

大師心經秘鍵御製作
嵯峨帝ニ奉給ふ
圖







其二

法縁つゝしみて解釈をかまへ家〻世のうゑ世俗
をいへどもはるゝよ鷲峰のむかし仏徒とのゝ
まのひかりる意の今より災誠をこゝろ事この書
ふゝくゝ好みゝ桂地のこゝを孫ゝ給ふ
るまゝにひかりぐをもかゝるよ

弘法大師行状記卷之七終



東寺を　　桓武天皇年安遷都のもゝ玉家
を結護をむかゝるあよ羅城門の左右よりかゝまて
東西西寺を建られし時延暦十六年孫大納言
伊勢人をもちて造寺長官をして第創し給
ゝ法師
講戒聖代弘仁三年十一月廿七日封戸を割て寄
ふゝせゝられし時寺起請符ふ云代くのほをもとめ
ゝ我寺の檀越ゝ法若伽藍無後世天下無後

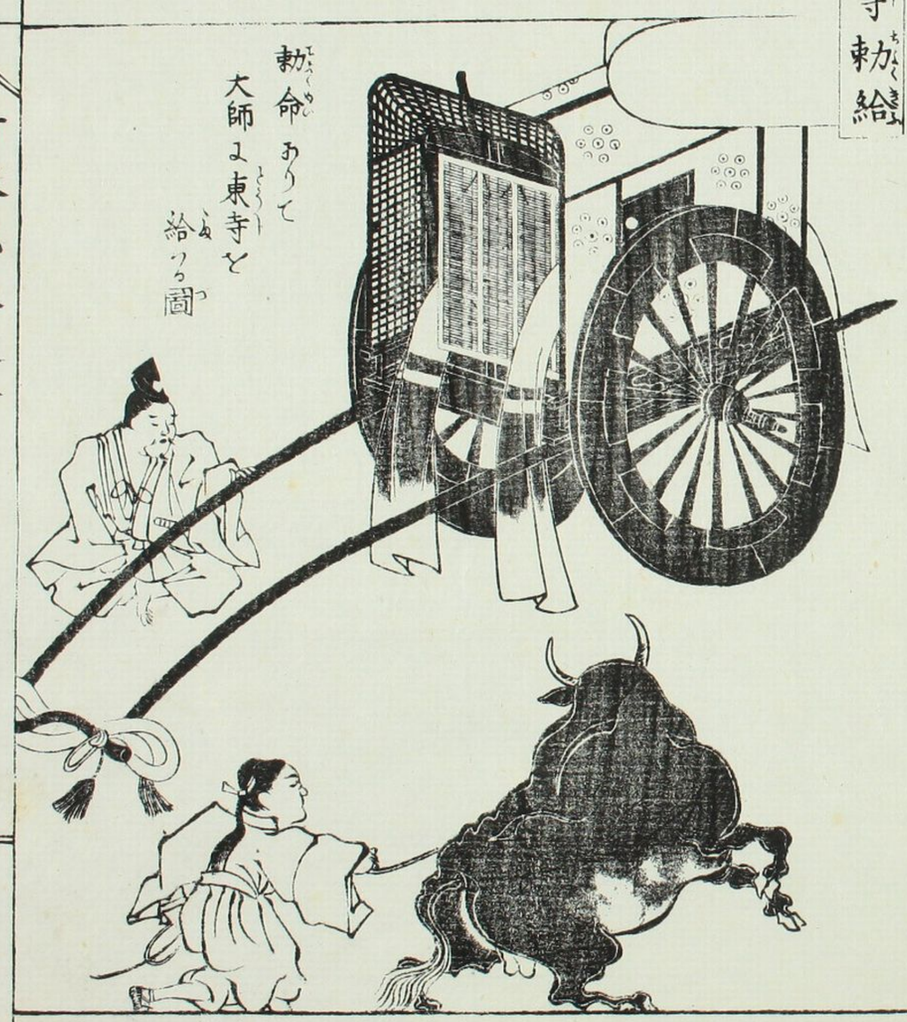
し伽藍衰弊せバ天下衰弊せん若亡乃の主邪城の臣
ひりて若も違犯し若も破障して如こ可ハずと云人
るるゝ三世ハ諸佛一切の賢聖を破壊ハ
むる罪を得く絶ゆ無間獄ゆ出ず数劫ハ中ゆ
永く出離ゆるゝ十方ハ諸天卒去の
邪ハ大禍を招くしかゝ子孫滅亡ゆ
若犯違せざる者ゆやまして法を発ゆるゆて
世に福とかゝ孫繁昌してゆに慶城城
出くるゝ覚峯ゆのゆんと載ら行ゆ又
東寺破壊ゆ及ゞ日本國中ハ大小の伽藍を壊

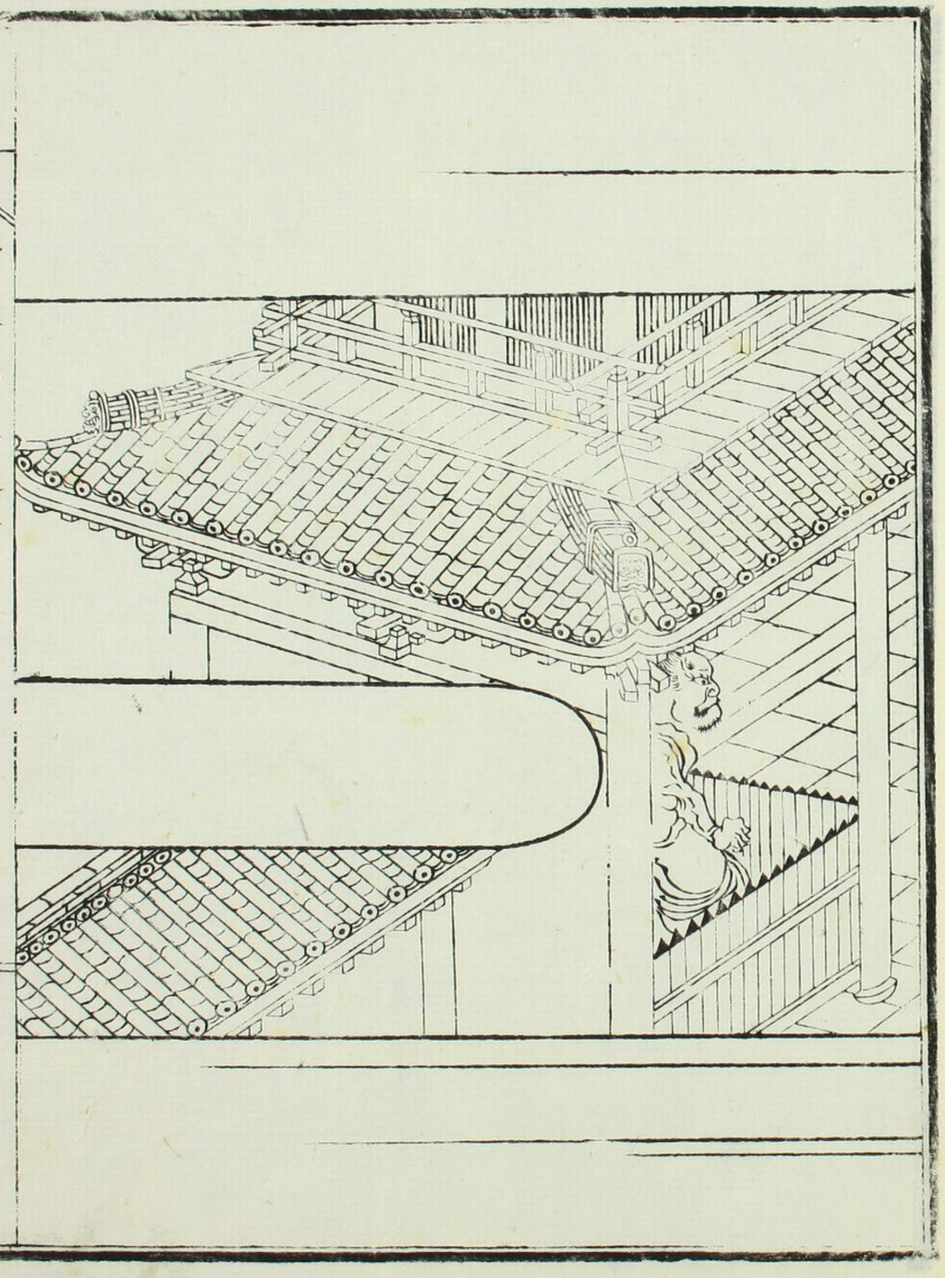
てすべゆを修理ゆるすべき旨　勅宣を作る
宗重の他ゆ如ぬべし
弘仁十四年正月十九日　忠仁公　勅使ゆして
寺ハ寺ハ永く大師ゆ給ひ宣旨数
の庭ゆ師ゆ相伝ハ不ゆ則大唐
青龍寺元ハ大官道場ゆし恵果和尚ゆ勅
給ひ例也ゆて大師請来一百餘部
ハ金剛界ハ法文三昧ハ義の佛像佛舎利河
闍梨附属の健陀穀子の袈裟道具ゆ悉く大経
義ゆ如ゆ宗の長者ゆ人ゆ授ゆ撿校ゆ

同年十月十日大師の奏ふりて文十ヒの定額僧と
地ゐを宗の經律論とを通し他宗長類のまと
ハまをいまし給ん密教根本の場をすべ比もれ
宮殿をかまへ講堂舍を建立し佛像を彫
刻まる事を數やく年中の行事僧房乃
威儀後大唐無若の齋供をもをび赤條袈裟の
古風をうつをり 淳和天皇の御宇天長元年
六月十六日造東寺の別當長恵大僧都試西寺
へうつさるく大師をあらびくる勢の人ハ手時が僧都
まの相を云宗長者の始ゐり志ゐうつをり



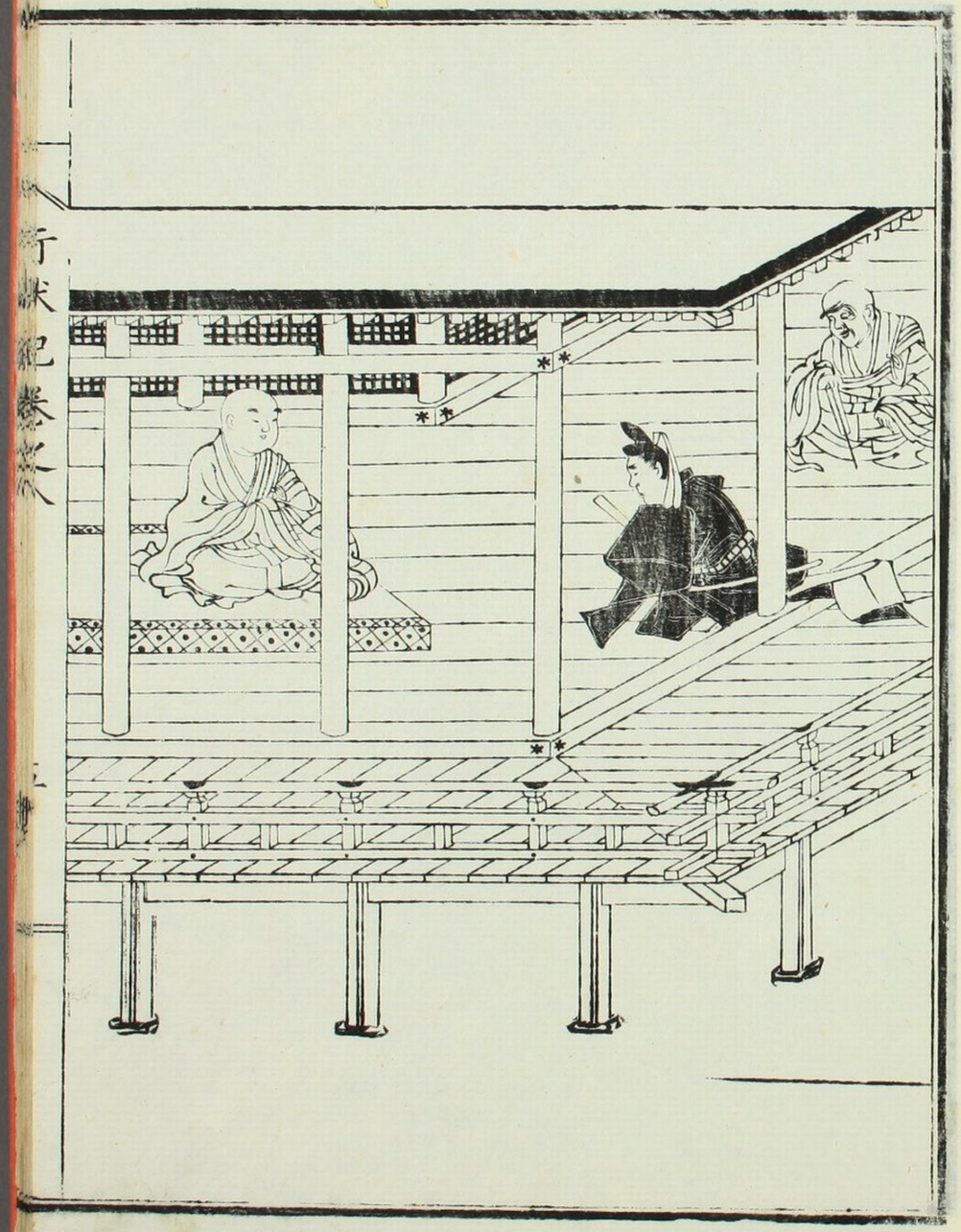
東寺勅給

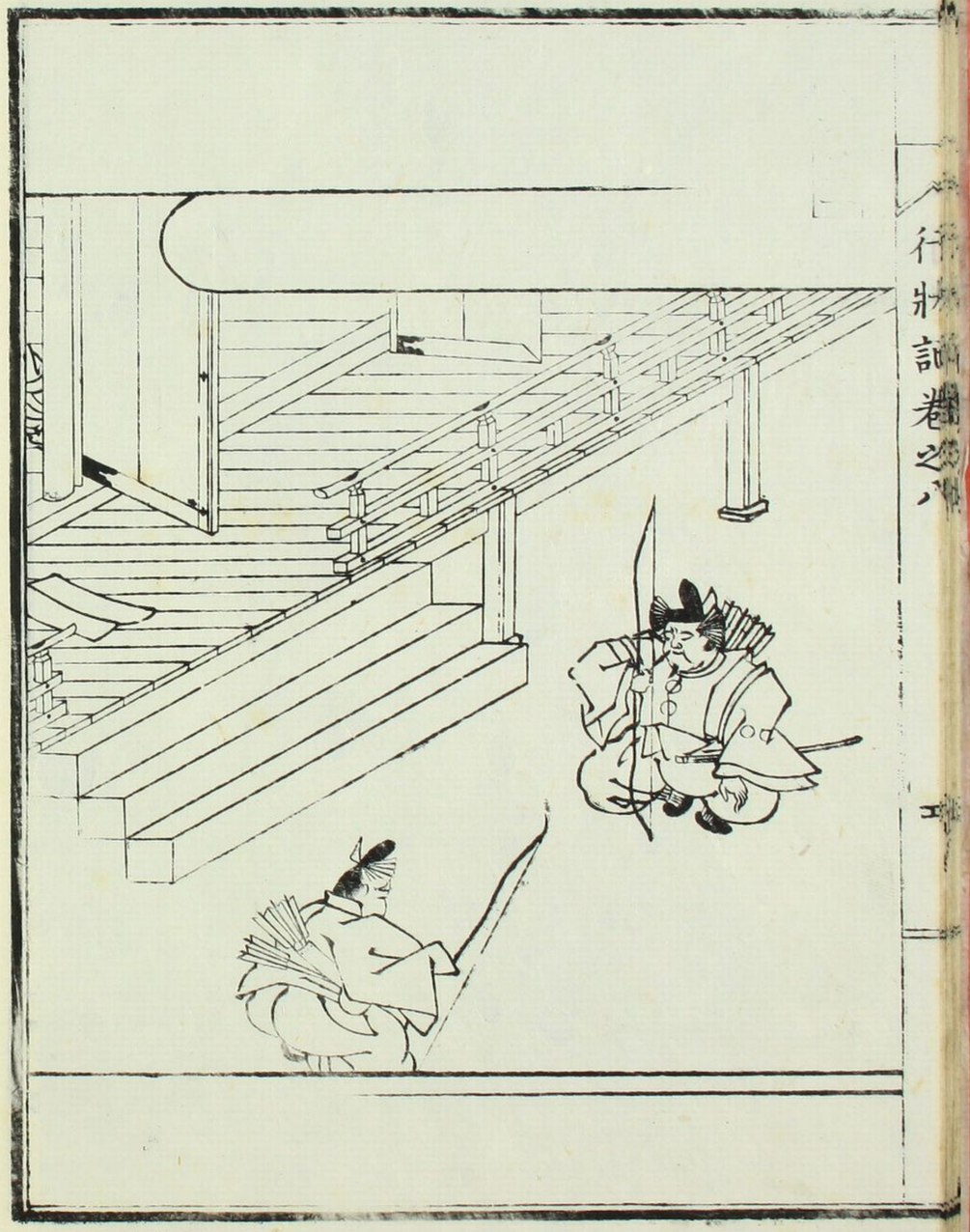






其二





まのあたり伽藍の綱維ふ昇く家初ふありいづる人とりもく一所閑梨として寺家と粧勢もべき規式とのこと新又唐朔の不空三藏勅ふもりく大官道場とりもく秘密の座もし寺寺と号給ふ雅じて東寺洛りもて教王護国寺と号もべき旨勅もり額を給まり大師地しく云東もの八宗密教おの旋の彷地る毫鑑蘆の眼同もり咽して教ハ王化昭明ふして華夷太平もり怠くあがめざまば朝ふ妖害ひりまふ災孔あり天下大乱あるべくば東もまば荒廃もべしと見へ〻り遠祀ふ杉ひく先事と考ふ保元平治の比もつ零落して伽藍ふ林ふまば堂舎傾危して佛像ふ数塵ふ埋うされき是只平太強乱のもる逆臣暴悪のこと〻べし祖師の祀もるもふ絶宛も堂とさもぐ〻平家退討の後ふ雄の文覚聖跡の陵廢とるもに東閑乃幕下大功の偉績ともるもに梵閣麓とるべる容堂ふみつもうひのまば王化まさふ古ふ復し兵権志むぐし政ともく名家の安泰とふもむ人誰ふ結ふの基址と崇ざんや

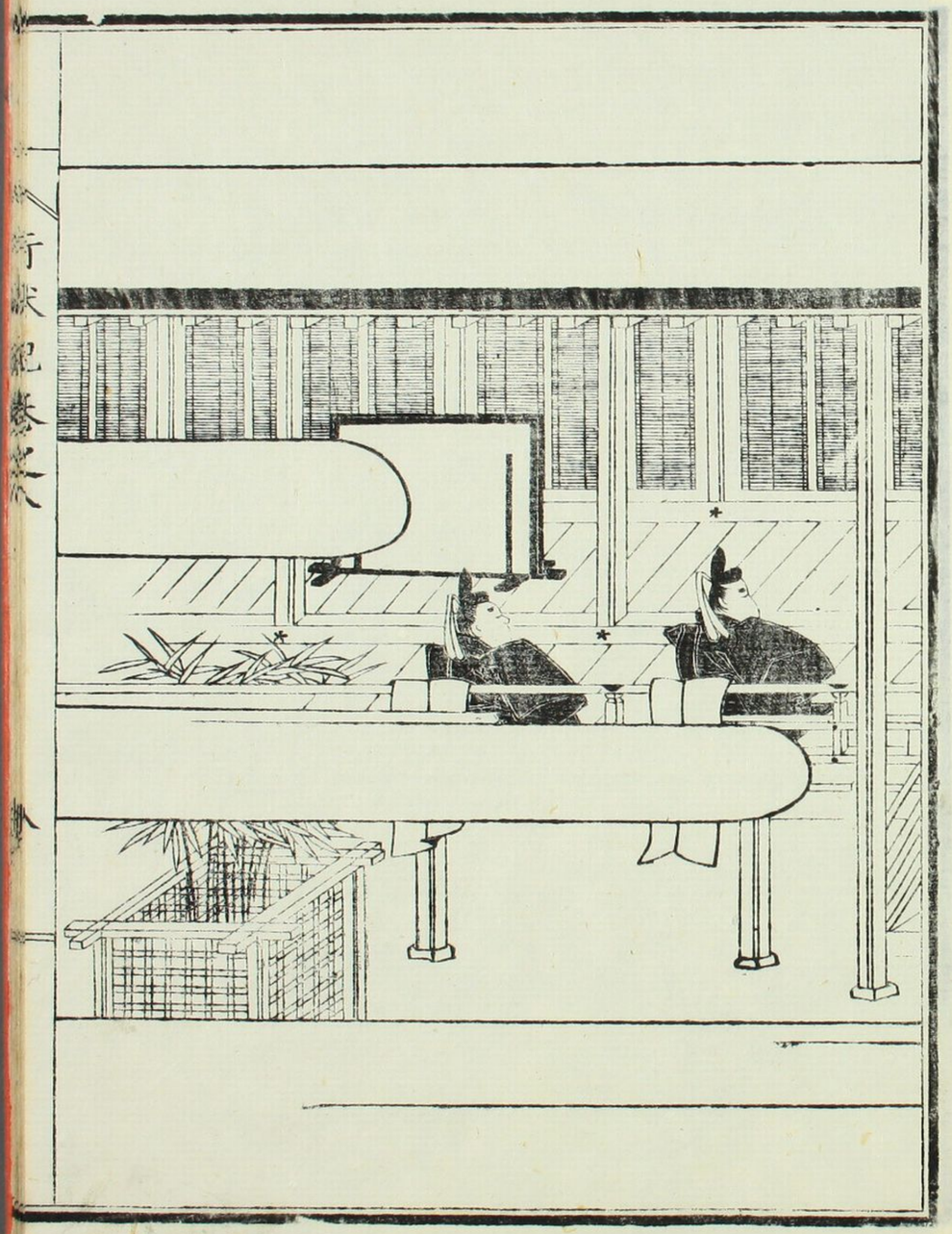
東寺法守八幡宮を
おがみたてまつる時　天皇ひ地をふ帝位のいまだしき
ときをもつて佛力を迷惑するをいのり給ひ給し
ふたりて大師ふ勅して靜謐のきのまをもと
ちかひ給ふふ佛法ハ王法ふりてんまり王
道を補ふふたりてひらまべしちやく八幡昊
補の結果と莊嚴ふいのりをもて百王擁護乃誓
約と殊府ふ作ましまさば九禁行ぐ風うふしく
日海風をうべし　皇位をまふりてひらまん
仏法見ぐうをもて主をべき多奏しまさんしべ



聖主すれ為御立願ありて伝作の　叡念浅
凝しましましふ補感むるしうまして天九をて
伊予ふ遣ふ江州勝多のにおいて平城の夏
軍敗ふをふ及て　上皇うとぐ帝位をを
將軍田村丸ぐうをもてまうさせ給て士卒ふ
ひまもれ都へ入を給ひぬ見たてまつる緇素
あやしき毋ど涙うずと　主上
勅宣ひりてよ涙しを慶流あうべしといへども
天兄ふをいまを多ふ優しうてまうるべしうてもせ
のごとく大和國平城ふ宮ふ遷されて御僧と落さん

八幡鎮座

華洛ヵ八幡宮
歓請おろぐき
旨と帝ヵ奏し
の人圖



東寺に八幡
大菩薩勅請
の時神靈来
現しゆハと
大師尊影を
寫しゆハ
圖

帝を彼第三の宮に奉り給の親王八東宮を慶して
出家成遂らる大師の宮に入を給て灌頂の法脈
を繼後ハ吳域に渡て遥に千度の境に越き
給へ志如親王是なり 天皇御立願を果
し遂まし海さむ[illegible]に大師に
勅ありて志る
ハ懈怠に一宇の社壇と勝て三面の和光成崇め
奉云ハ法味を執し蘋藻を供給ひしかハ
吳神心御に感應して當殿空中に儀然あり
大師別奇特の思ふらんに渇仰に誠といふして
御祈と祝願ふらせし空に光うさ祈く本像に

きざみあらはしてなむく寶殿に移させ給ふ
らる今ハ護寺八幡宮是なり 光仁天皇御宇
寶龜八年六月十八日 祝宮ありしのたまはく右羽日
辰の時に法つとなりて三海の戒を受べし今より
以後八殺生と禁斷さん但家の〻光り巨害人
業出來る事ハ[illegible]時ハ此限に[illegible]
今吳祝の方に出家吳業ハ[illegible]儀式
とのたまはしまし云濃の道場に詣成給まし
し誠ふらし帝の神意なり大師を自額成
造ら給て入木ハ詠と給ふ今に蕭寺の窟庵に

やうじまりてまきふ神通の芳譽試顯ハ勝りたる
ありしとうまのうち勅請年舊て星霜志バし
法ものうといへども利生風香しくして和光同塵の
言祖製作の昊雄氷雪の如くして古のごとし大師
志筆の額露題のまりて粧飾ありむうし巨唐の
肅宗昊武ふ幸し給し時不空三藏玉壇ふ八方
神祇の秘法をもぎれ鎮心ゞ礼を拂て奴京の
日試奏まうふまうして言のごとくなること試えてう
今　本朝の　聖帝主位をさりも給へる言祖
大師を紀ふ八幡昊神の法坐を勧めしうバ平城

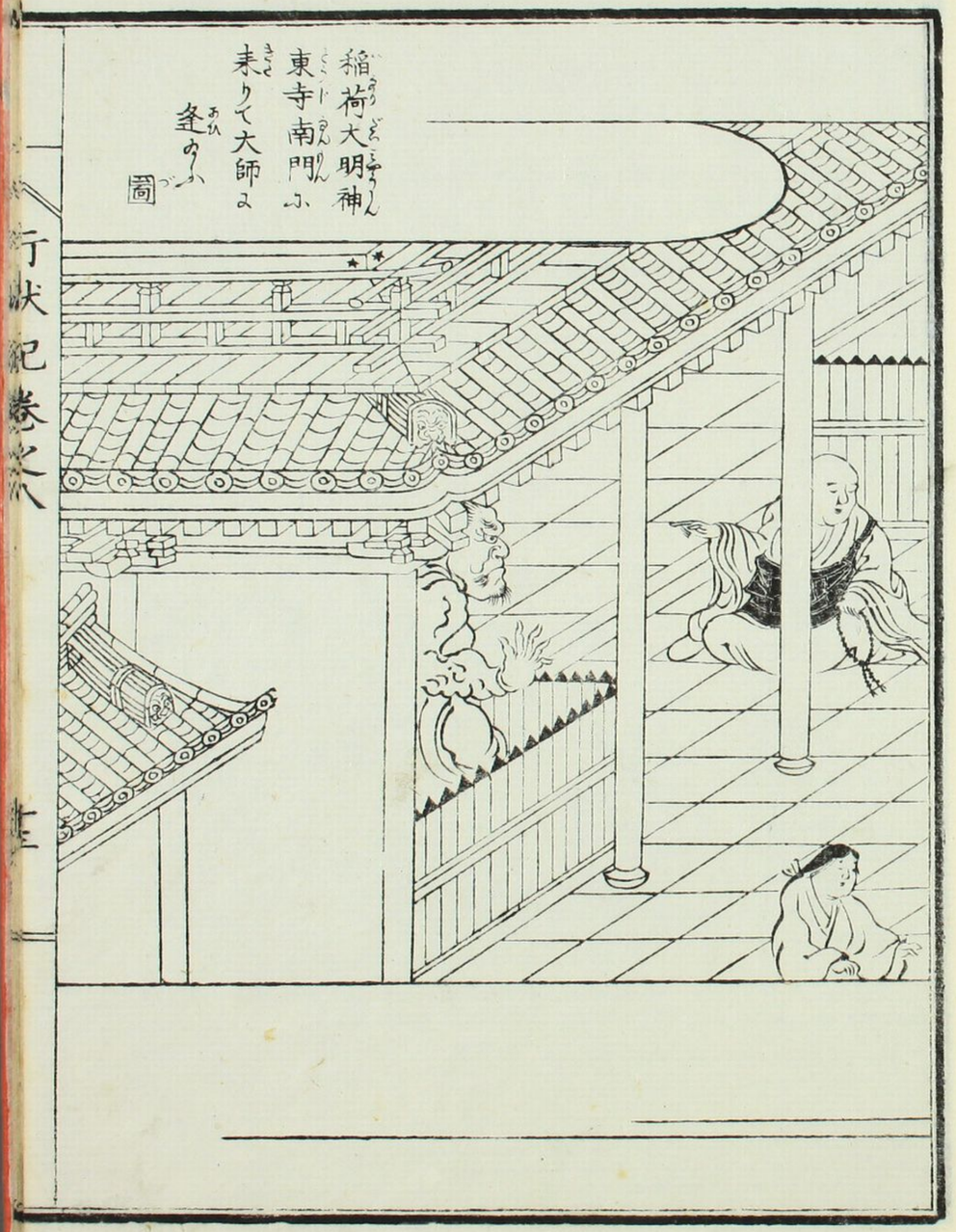


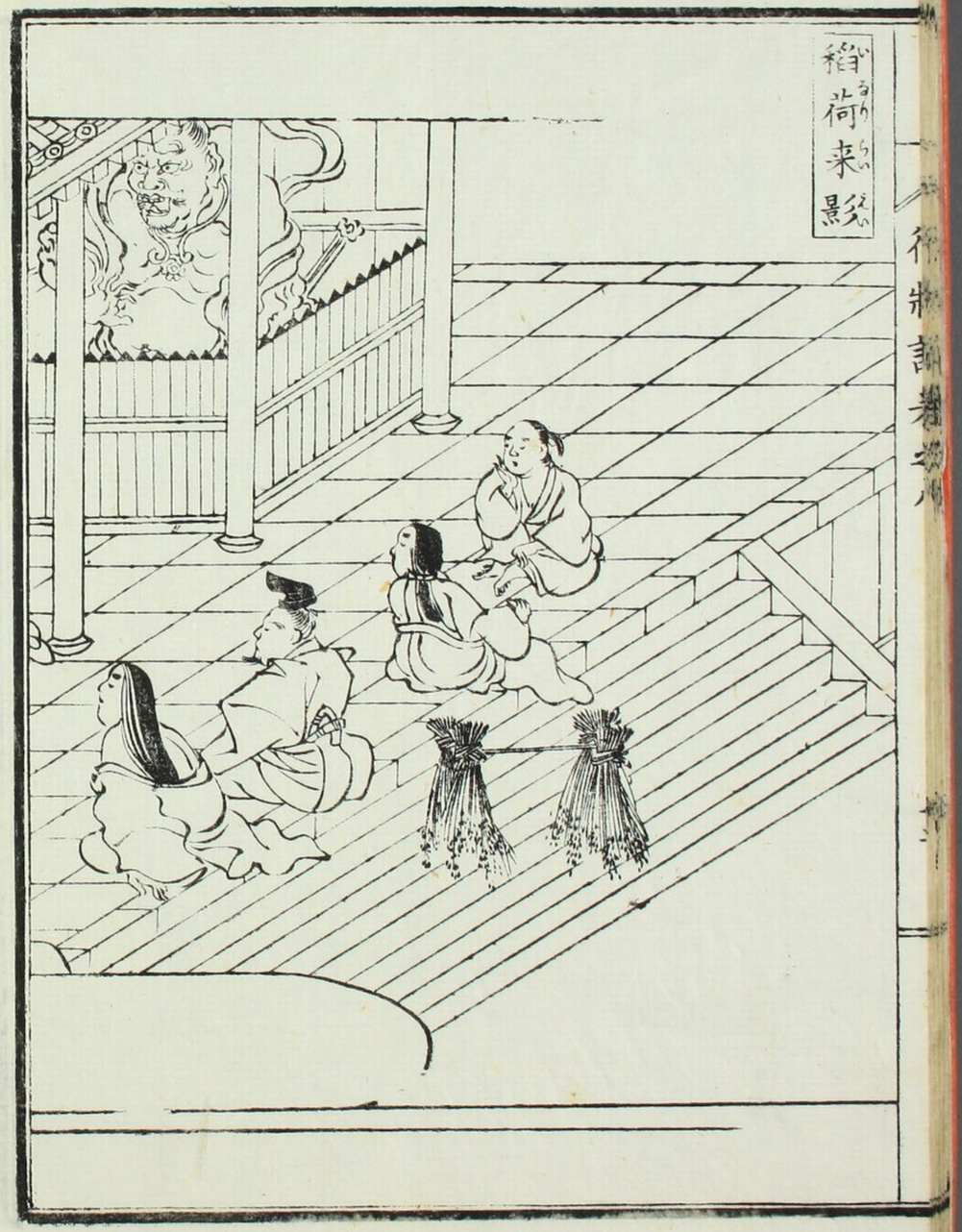
外軍破く寶圖とやまむる事奏事たのもうしし
和漢ふと昊ものもども法威を揚て　皇位をさうり
ふ十るれもれ古今是無ゆしをや倩ありむし
まバ大菩薩を　欽明ふ聖代豊明宇佐の郡ふ
して始く三歳の小児とのうれまうく作業う
立て化しくの給ゞく我八是日本ふ第十六代
誉田天皇廣幡の八幡麻呂也我名とバ護国昊猛
威力神通大自在王菩薩と云て国ゝ不ゝ守護試神
道ふ意とのの給へり志うのまバ八正の幡旗試建く
邪佞の賊を退け八毛ふ線幡を織て正理乃道試

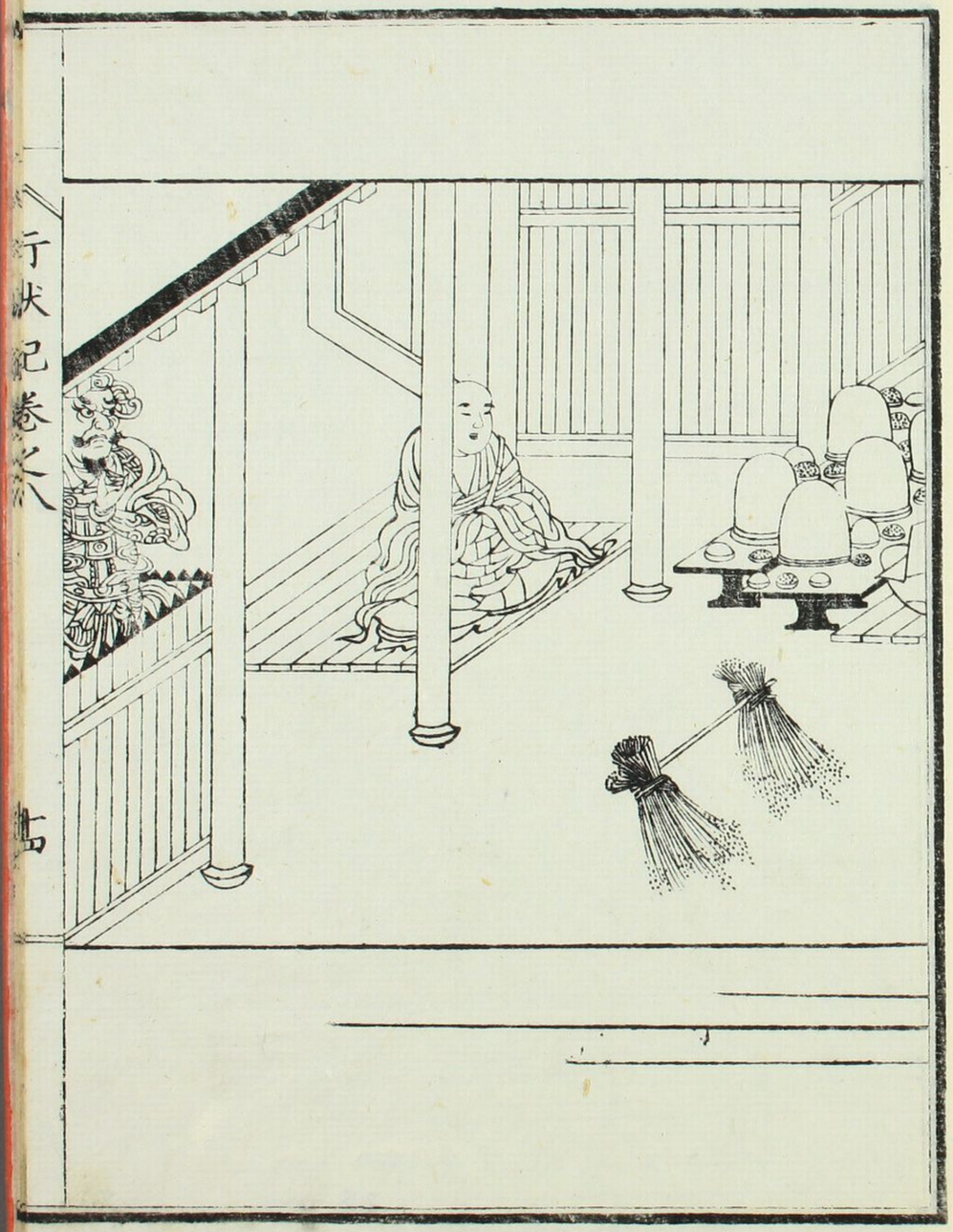
かぎり給ふ所なく徳化華夷に溢れ神恵遐迩に
ふるしむ利物の方便いづれも優劣ひとしきをひらさ
まざまものがたり　帝城に来りて　皇国氏守を
もし法を責べし仰べし
張儀の聖代玉髓法ぐるくして寶算久しをたも
ち給のミにあらず一紀五年の化あるづみて六合を
平ぶ徳と感ぜざるもなし　仁の来り及く
脱屣の後　淳和の御門帝位あらせを給ふ後
源氏は天皇　張儀は第二宮　受禅あらせ給ひ
おいてるまで　継体の天子　仁聖を



の芳齋ることを是神加護のもたらしもる所大師拾念
は遠ふかりしかしるべし
弘仁七年重夏の比大師年齢の時紀州田辺乃者
ふて是和の老翁ふあひしをうけ長八尺許背
ちく筋ふとくして肉ふ大樹の氣と含み外ふ
凡夫の相と現せり和尚と見てまうして拝して
ていねく宮神乃ふあり聖ふ威徳いまひとしきを今
菩薩この所ふいらり給ふ資子ら幸ふ有り大師
のたまくく是山ふ育て面洗きし時の誓約ひまを
ますんぞ此生化生形是ふして凡夫ふ不に秘


稲荷大明神
東寺南門ふ
来りて大師と
逢の図


稲荷来影





其二

大師稻荷
大明神と
伏見の杣山
ふ鎮壇の
圖

教紹隆の勅あり神は佛法擁護の誓いまたもよ
迷者を利して同く覺者を遊ばし給よ　帝都
九條の一坊ふ一の伽藍ひのり来まと号を法成
結ぜんがゐふ密教と無きを初めりまの所まて
結ってまらん必来給べしと祈んぐ給ふ申ってひ
あまひしよ化人まるいち盟約をる場を
同十四年正月十九日大師　恩詔とら爭来寺と湯
く紹ぐく来言の道場とるし給ってり三四月十二日
彼紀州乃化人稻と荷ひ掲と持く来帰とるひ
二ふと紀ねて来まるれ南門ふ来りの踏み給しよ

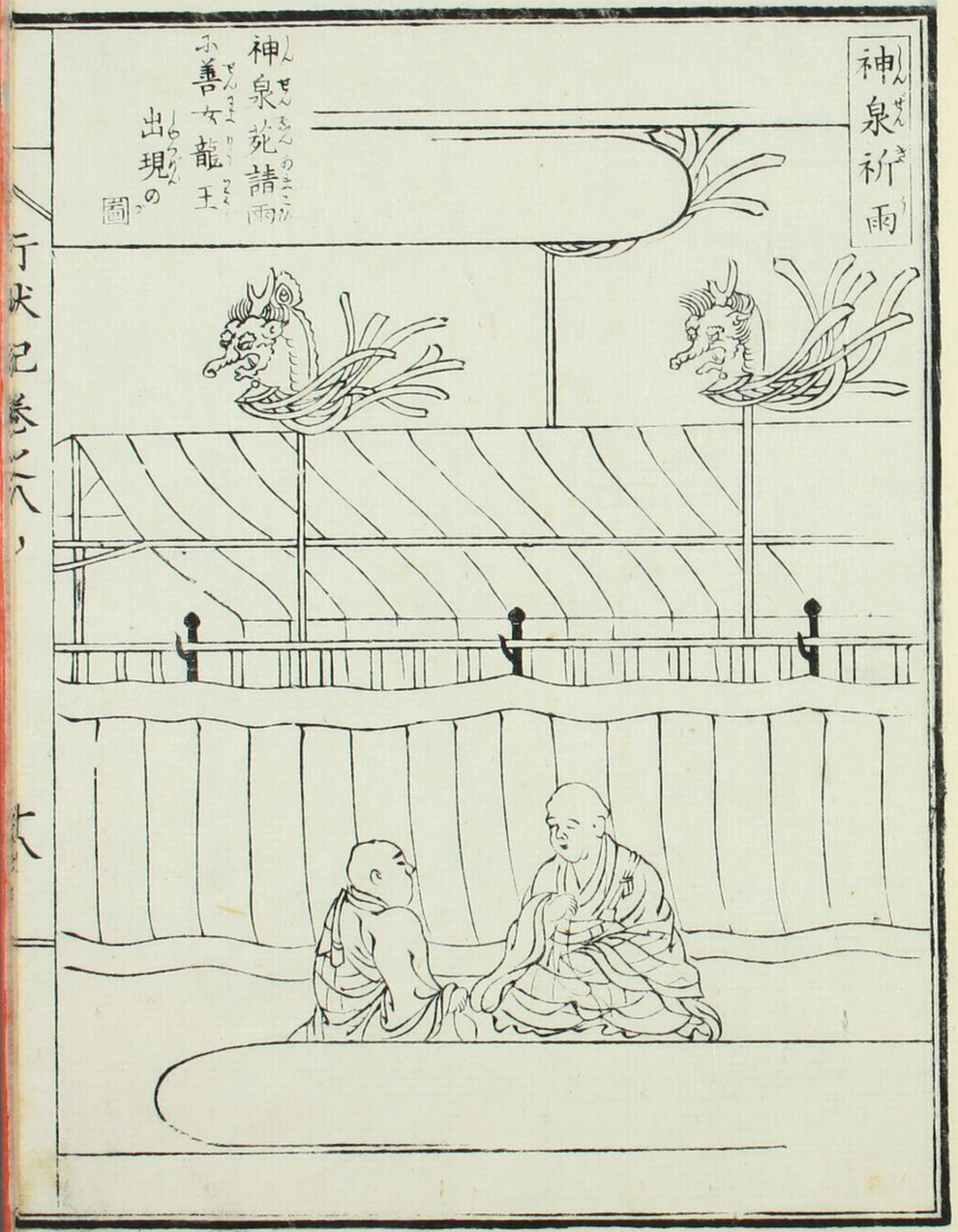
大師遠ってまりて怪とるし識と抽で神祐と
ひのあ法来と酷給し時道俗老と敬て瑚璉成侍
八簠簋と秋ぐ列まりを後志ぐく八條
二階の宗まぐ宅ふ帝し給ふ大師を同　帝都の
醫ふひのってり私心と悲ぐ利生の徳化とさぎめく
一七ヶ日勅の召法ふまりて堂結壇し給ひ今の
稱荷の社老ふり彼八條の二階堂八今の四旅不なを
大師神樂とつくり願とうせ給ひまりさらに祈しぶ
今の祭礼の時老とひぐってまるるむ
天長元年仲春の比天下大なる日でりを公卿

勅を下されて大師をして西をといのうしめひとを寶よ
守敏大徳奏し申て云守敏奏云と学して同事を
をつとも我すぐふ上蘭らう先う事なりて
むこうのべしと奏上ふりて守敏ふ御くいのう
ものらふ七日のうちふ西ぐ方をといへども徳う
京中をうふわしていまぐ外ふ及ことなし
和尚を大師をして神泉苑ふして請雨経の法を修
きうれしよ七日よりのひぐ雨ふしば大師堂をして
定よ入く足給ふよ守敏呪力をもて諸龍を水瓶
の内ふうをを見せうの但ふ天竺の境西難池より中ふ



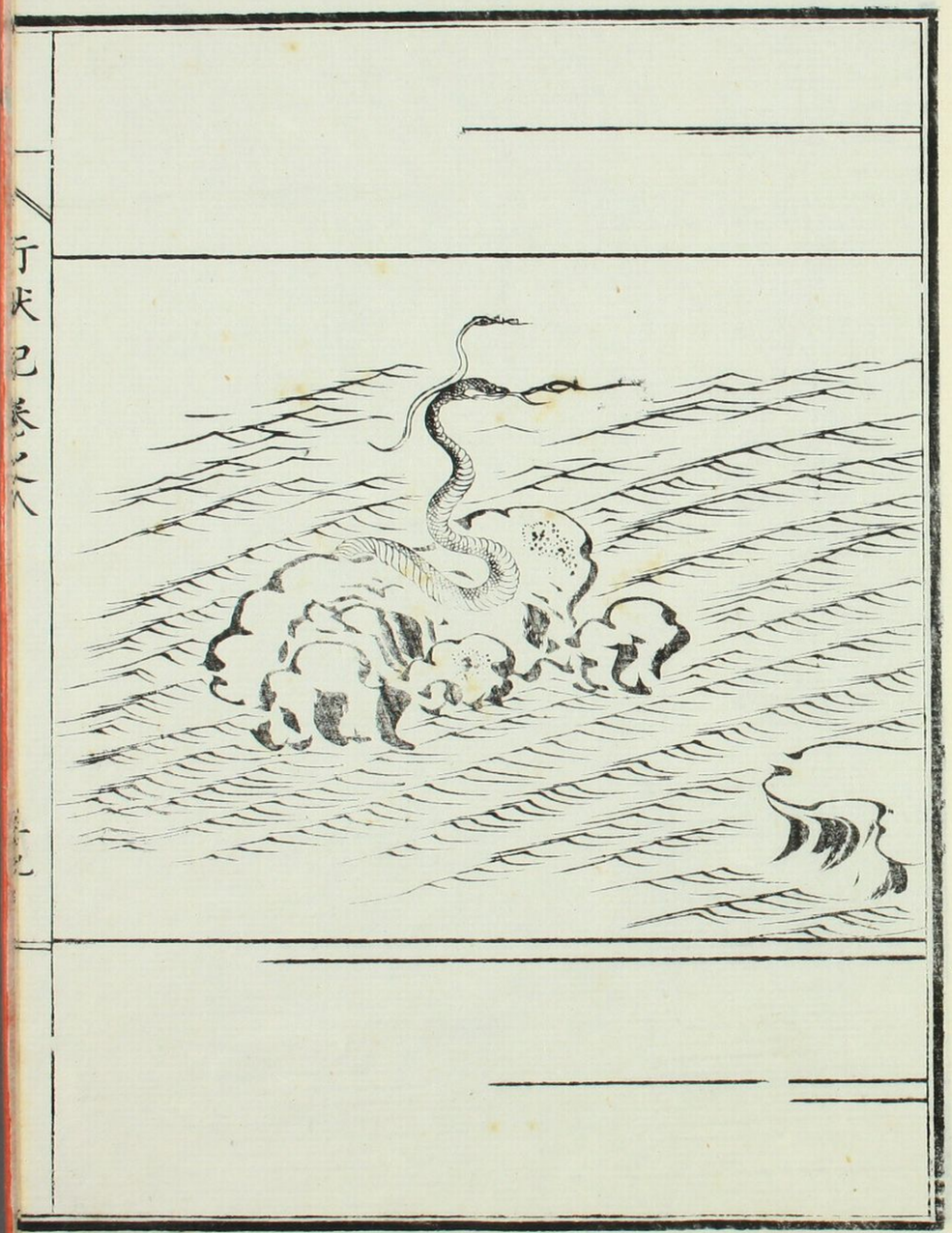
龍王あり守敏ふ向ふ給ふとも覽じて公都
よ申うをて修法二ヶ日とのべられしよ若女龍王
奏云の奥方をとうとうび形精の密志を感じく
神泉池の中ふりを形をのうせり金色八寸の
蛇なりさ九尺ばうりあり新蛇の頂よのまり実恵
奏御奏雅奏紙奏曉真徳等の大徳まの行うり
奏れを年し給うり自余の衆子ハ敢てううてま
法をふ行くいばつふうをまるよ石城志ふしく公都よ
奏少し給よ和氣奏綱と　勅使をして四幣種こ
の物を時うてまつりを龍王城徳奏し給ふ密雲

うちまた池より鑿渠して甘雨まさに滂沱あり
池水湧みちて大壇の上ふいるれり三日の間洪
雨志むくふりて普天より下炎旱なりを休收
上一人より下四元よりいたるまで首とうれ掌と合
勢ざるハなし志云時道ひろく光くして事まれ
ようを泳さうりおり公家貴と毋るまれく世よ
お給都よ任ぎく新奏辞し給と兼三ありと
いへども　恩詔志きりふくくりて是でいちし
まし法さて大師の給もくまめ池水龍王元を
乞云勢達池の誘の類ありて慈悲ひりて人の為よ



神泉祈雨

神泉苑請雨
小善女龍王
出現の
圖





其二

其三

害如何　御修法の法人に託してまもりを為せり
若し龍王池の界に　うるべし池あり水減しく
世落く人　うるべしの時にいたりて門徒
うらむ者須く公家に　ちかしあるとも私に
報ずべし　法味をたてまつるべしと　経法中に
涼位の薩埵利生の相を　説きて難苦法つに自
主を得る所に　諸の轉達地の中に入つ法に慈
雲と興して　流注を蓮華し鎧甲法中に清
水と出して　瞻部州の有情類を潤ふ　こころを載
くり志ろ　ひるるに彼番心の天池を　鎮して動ぜざる

華洛の游潭ふ　うりまして　もしれ慈念の誓に
りてさられ勸請の　ゑまに　ゑまに新あるべし　誰の
人に渴仰の心を凝さざらん
誘樹の論ふ云　摩伽陀に誘王あり　諸波羅遲
とるづく若し　佛化　世の　飢饉
の世くづゆ　ゆ　膏雨　ぐして　ゆ
ありと　ゆ　ぜして　見
書見祈泉　誘の　盛海ふ　べ　ゆ
八代の御門　処　年に　元昇　乃突
却ける時八　池と　酒掃ありて　祭奠を　祈ふて

まつり大師のつ徒をえらびて修法の規模をと
のへ給祖風あひつゝはまして茅茨違ことなし書幅
皇華の宝まとてる海詩宮の荘厳とうゝ宝燭
玉壁の燈ふつゝなる雲輪殿の舎場ふ砂ゝり閣
梨穀漿と絶て法と修し俗俗尚樸と打えもちく
経典指ぎ日新不断の軌則ふのらめよ編まいしし
法のゝ先ゝ殿を忘くゝり中みも延命院の修法元暦
天禄之年修法の時ゝ茅茨の詩形打もまもまつ
宮とうゝもく雲漢かのゝり晴天と變じて洪雨と
下しれ

小槌伯正仁海長元年中度ゝ勤修ふい度ゝとれ
赤蛇きゝゝつて壇所ゝ入来垂鐸て池上ゝり相ひ
四重鑾鐸として善天霹靂ゝり後成当結覚成
寶成賢等ゝ英匿ゝ宗闘の証と合て志ゝり茶
天の感とゝつゝ場ゝつぶさとのゝたいとゝ伯しで
相ゝ大陽実と伯め卒去稀ゝ人天綺頼
詩神敬ゝ千ゝと秘密の加持ふ十ゝとゝ
遠と昂ゝ源ゝ弱ゝ人の号伯ふ与ゝて法の異
徒と蟹ふ寸ゝ今ゝ仏とのゝ踏みゝ池あさく
水ゝりゝ相ゝゝゝ詩王化境ふゝり給へゝと

うくひつべし　志うの事ども大師行念の窓念う
ま神詩慈悲の誓約ちぎりていまぞ玉とそて
給ふさうふやちうれはひまでも修法の結ひの川
うり人唐斎の精誠を抽ごとに甘露法雨潤
ひどもさびとうふ　比地りとハ乾隙園と
名付て　壁を遊覧の加ゆり叢泉流涼くして
水之伏の裏と帯しく松柏陰ふ茂くして風一ぢの
秋風とぐひ歌堂舞園のうとひ柏梁の昔の跡風
うたし　朱楼紫殿のまへ蘇宮ふうれくを
風習歌吹のまゑ音ゆ彩とるく詩酒乃ひのぐび

奥とりくりてさ大師修法の後ち神神潜宅乃
変とるりし所ち代くの　帝王ち重風ひのぐ先
家くは賢活ふ事とうやまふ徳ふ　後鳥羽院
ぢうぬ内を給くうり比処ほよりれ荊棘の
路とうづ新のふ所のび猪鹿の蛇と害ちる風
ちれうる流鏑のうち護法の聴風響うし龍蹄
ふひび冥応のひとさびしうも見風ちる縞素
地ちる事ちうずとうれうれ承久大乱乃
後武刑泰時国憲とたち事時崇敬の誠とひ
薬師とめくくし門戸とうめなぐく雑人の往来

ちぐ巻しうどもを援涼煙志ばしひのしまきて
門墻粥よ傾しうぞ今八ちぐ牛るよ牧ゑ乙ち
を乙人の通路とるまりさぐ巻て志りぬ諸神乃
冥恵ゑ給まびぞ大師の玄聖面ちうざうん紀
者ちし活ちして治世の箕ち発ぐうちさんちやく
倦怠と加く崇重し給ふべしやは処ば毋きあ
られば玉家又坤さまきうんべきがゆ為ゑ事乃意と
志ちむ人乙あんを乙ぬるうんも須く乙精ちいち
して法味とまうべし崇報恩の為ゑひのしざしひや
ム法大師行狀記巻之八終